



TITLE:

<研究論文>母子間コミュニケーションにみる乳児の自己主張的行動についての分析: 主張しないことが主張的なふるまいとなることの意味

AUTHOR(S):

濱崎, 裕美

CITATION:

濱崎, 裕美. <研究論文>母子間コミュニケーションにみる乳児の自己主張的行動についての分析: 主張しないことが主張的なふるまいとなることの意味. 教育方法の探究 2005, 8: 75-83

ISSUE DATE:

2005-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190304>

RIGHT:

母子間コミュニケーションにみる乳児の自己主張的行動についての分析

—— 主張しないことが主張的なふるまいとなることの意味 ——

濱 崎 裕 美

1. はじめに

本研究においては、生後1年目後半の乳児と母親とを対象に玩具遊び場面の観察を実施した。この時期明確に頻出し始めるとされる子どもの自己主張的な行動について、子どものだのようなふるまいにいわゆる主張的ニュアンスが見出され、母親とのやりとり作用しているのかについて分析し、この時期の子どもの自己主張的行動に象徴されるような発達について総合的な考察を試みた。

2. 問題と目的

(1) 生後1年目後半という時期：子どもの成長と母親の意識の変化

母親は、誕生以来我が子の世話をし育ててゆく中で、例えばそれとはしらずに我が子と“微笑みあったり”、子どもの反応を肩代わりするような言葉を発したりする。発達初期にみられる生理的的微笑であっても、実際の対人場面においては「嬉しいの?」「ママがわかるのね」などという解釈がなされ、それがより深い愛情に満ちた関係をつくるといったこともままあることである。このような乳児とその母親の間をみていると、そこにやりとりをする確固とした個の有無は問われていないようであり、寧ろこの原初的なコミュニケーションにおいてはまずやりとりという動きと母親による積極的な意味づけにより、豊かな発達可能性がひらかれていくように思われる。実際こうした慈愛に満ちた関係については旧くは愛着関係という概念(Bowlby, 1991)によりその発達への影響可能性の表裏を論じられてきたりもしたし、関係性に留意した研究は様々にあるだろう。

こうしたいわば母親による意味づけが優勢な関

係にらの時期であろう。この時期は発達初期における最初の危機期と称され(Vygotsky, 1987)、言語獲得を中心とした知的側面における発達、また他者依存的であった身体運動面では自立歩行が顕著になるほか、いわゆる自己主張的なふるまいが頻出してくる時期にあたる。公的な研究として残ってはいないが、以前この時期の子どもを持つ母親たちへの簡単なインタビューを実施した際に、ある母親は我が子の主張や自立歩行が頻出してきたことを評して『なんだか急に(赤ちゃんから)子どもになったみたい』『あれこれ抵抗する』『人間らしくなった』といったような思いを述べていた。それがどのようなものであれ、それまで自身の庇護のもとで依存的に存在していたという意味で我が子について半ば一体化していた意味意識が、これら諸々の発達の变化を1つの契機として变化したことを象徴するようなエピソードとして興味深い。それは子どもと対峙する者にとっては全体的に“その子らしく”なってきたと思わせるような変化であり、特に日々交わっている母親にとっても子どもへのかかわりや意識に劇的な転換をもたらしうる事態と考えることが可能であろう。

では、そのような転換をもたらし得るこの時期の子どもの自己主張的行動はこれまでの研究において、どのように扱われてきたのだろうか。

(2) 自己主張的行動に関連する諸研究から

① 伝達機能としての自己主張的行動

コミュニケーションにおいて言語は他者との疎通をはかるのに非常に重要な要因であることは否定しようのない事実である。またシャノンによる単純な情報の発信-受信といった伝達過程を説明

するコミュニケーションモデルが広く受け入れられたのも「相手に伝えられること」がそこにおいて重要であると暗に認識されているためでもあろう。このような背景をもちつつ、乳児の非言語的発話や各種行動様式の分類（大浜他、1979；斉藤他、1981）、伝達行動の獲得過程の検証（ex：Bruner, 1976；秦野，1983，1984）やあるいは近年注目される共同注視についてある特定の認知メカニズムを想定する議論（Butterworth, 1991；1995）、さらには「心の理論」の基礎的行動と位置づけ、特定の認知機構や共同注意スキルの発達という乳児の能力性に拠った説明を行う流れがある（Tomasello, 1995；Baron-Cohen, 1995a, 1995b）。ここでは想定される伝達行動の獲得過程の説明、あるいは到達程度の追究が主眼とされている。その点で広く一般に適用可能な発達の説明を与える一方で、いわば「誰からみても主張的な」行動に限局しての議論にとどまっているとも言えるだろう。

また、こうした研究では周囲他者の関与の重要性から母親とのコミュニケーション場面が採用されるのもしばしばであるが、しかしその多くにおいて母親は単に背景的な取り上げ方か乳児の反応を引き出す「刺激」に終始しておりさほど重要視されているとは言い難い（鯨岡、1987）。その結果、折角對他性を考慮しようとしても、いつ・どのように要求や拒否として捉えられるふるまいがでてくるのか、“できる”のか、といった個体還元的な能力発達観を背景とした乳児への議論が展開されているように思われる。無藤（2000）は〇〇“できる”こととそれによって何を“する”かは別であると論じているが、研究者側が想定する自己主張的なふるまいの有無、到達の程度といったものは“できる”と称されるようなものを取り上げているだろう。

一方、ここでいう“する”ことは行為主体である当事者に迫るものであり、個々の発達の様相を表すものであるように思われる。

本研究においては、こちらの“する”という個々について焦点を当てたいと考える。したがって必

要なのは、実際におのおのの母子関係において彼らがどのようなコミュニケーションを行っているのかという具体的事実からの出発であるだろう。

② 母親に読み込まれる自己主張的行動

初期母子関係はよく“非対称”と表現される。乳児に周囲他者との関係を円滑に促す生得的能力が存在するとされる一方で（Bower, 1979；Brazelton, 1982）、母親の側にもある特別な感受性が備わっているという仮定の下、母親が状況や乳児の状態を積極的に読み取り、それに応じて“適切な”養育行動をとる姿勢や構えを称して直観的育児、傾倒的育児〔maternal preoccupation〕としたり（ex：足立ら、1985；Papoušek & Papoušek, 1992）、母親の代弁行為の分類や縦断的な発達の変化を検討した研究（ex：岡本、1999；岡本他、2001、2002）が蓄積されている。またAdamsonはかつて、言語もなく身体的にも非力な乳児なのに母親との間でコミュニケーションが対等に成立しているようにみえるのは何故か？という問い立てから、母親の発話や行動特徴の分析を経て母親の側にコミュニケーションにおける補完機能の存在を示唆した。こうした研究は、母親の働きが支える乳児とのコミュニケーションという図式に拠り発達過程を考察しようとしている点は興味深い。

一方で、ここでいう“非対称”という言葉を考えてみると、そこで乳児において次第に洗練されゆく想定されるコミュニケーションとは相手である母親と同様のそれが行えるといったような対称性が潜在的に前提とされているような印象を受ける。このように非対称から対称的なところへ至るとするプロセスにおいては、結局のところ“できる”ようになっていく、獲得のプロセスを追うことに終始してしまうだろう。加えて実際のところ、母親は子どもに対して常に“補完機能”がよく発揮されるのか？そうした支持的なかかわりが子どもの発達にとって常に有益なものであるのか、という疑問も残る。

さらに、自らになぞらえてコミュニケーション

を理解しようとするれば、相手の言葉を理解しその意図を予測・推測し、それがやりとりを可能とするという認知機能がまず先に意識にのぼり、あたかもそれによってコミュニケーションが成立していると考ええる。しかしながらそれら認知機能を発現させてきた一要因に対他者経験があるということ踏まえると、初期発達過程において原初的にあるのは、身体の動き・言葉ともつかぬ声、つまり動きという言葉に集約される他者との絡みであろう。そこから始まるやりとりは、相手により意味が読み込まれるという意味で必然的に不確定性を孕んでいるものである。従ってここにおいては“できる”という個体還元的に括れるような一定の表現様式が論ぜられる以上に、行為主体における多様なふるまいの可能性が与えられるだろう。例えばそれは“できる”けれど“しない”といったふるまいかもしれず、それが不調和な展開を経験させることも実際には少なくないだろう。その意味で実際の関係性に生ずるやりとりを“する”－“しない”という視点で観察することは有効な選択肢であるだろう。

③ 関係発達論的アプローチから

近年盛んな関係発達論的アプローチ（鯨岡、1986；1998；1999b）では、単に行動的次元のみならず間主観性などの概念を導入し、それまでの発達研究において看過されていた（ある意味せざるを得なかった）個々の情緒的な交わりも含めた関係性からより全体的な発達過程…自己－他者各々の発達、また両者のまさに関係の発達を描き出そうと試みている。そのうち石野(2001)では、2－3歳児と保育者との保育場面でのやりとりから、子どもが保育者に依存しつつ自己を立ち上げるというある種の矛盾やゆれを抱えつつ生きる様子や、養育者的な位置づけにある保育者が子どもの巻き起こす事態に巻き込まれつつもそれを一個の自己として自立してゆけるよう支える安定した存在として描かれ、両者の密接に絡みあいながらの発達的变化を非常に巧みに記述することに成功している。

しかし一方で、例えば育児に臨む母親の葛藤やストレスにかんする研究などでは、一般に母親が複雑な思いや感情体験を経験していることを如実に表している。このことを踏まえれば、実際に育児に臨む母親が子どもへの働きかけや受け止め方にゆらぎをもつ存在であると理解されることはごく自然なことではないだろうか（cf：藤崎他、1992；津守、1987）。実際、母親にとって本当に我が子がそのように（自分が思ったように）思っているかはさしたる問題ではなく、親は至近にある我が子の気持ちの受け取り手として、ある意味では自分に都合よく解釈しはたらきかけるだろうし、あるときにはまさに子どもの気持ちに沿うようにかかわることもあるだろう。これについては、一部には斎藤（1992，1993）によって、子どもの「自己調節」機能の発達が母と子の情動的な“なぞり”あい次第で母子各々に自我機能に種々の障害が生じる／ないという違いが生ずることが文献研究から明らかにされているといったことがある。こうした知見から考えてみると、従来の自己主張的行動にかんする研究においては母子の調和的なやりとり、例えば伝え合う・伝わりあう関係、支える間柄といったものが多く抽出されてきたが、実際には不調に終わる関係も日常では多く経験されていて不思議ではないことがうかがえる。従来の知見では誰がみても調和的でいわばポジティブな経験となるようなやりとりが主として抽出されてきたが、こうした不調和なやりとりをも含めて考えることは、個々の多様な発達の実態を捉えるためにより有効なことではないだろうか。

(3) 問題の整理と目的の導出

以上のことを整理するならば、広く一般に認識される自己主張的行動は、この時期の自己の形成や発達の指標とされ種々の分類や実際の観察場面から知見が蓄積されてきた。その多くは情動表出を伴った明確な意思伝達の獲得を以て自己主張的行動とし、自己の萌芽についても論じられてきている。しかしながらここで自己主張的行動とされるのはいわば誰がみても要求／拒否などと認定

できるようなふるまいに限られており、ある種の獲得機能として個体還元的な説明にとどまってきた。或いは関係性においてそれらを捉えるにあたっても、基本的には明確な意思表示のもとに共感や感情の共有や一致などの結果に至った、いわばポジティブなものを取り上げたものが殆どであり、実際の具体的な関係性の中において予想される多様な情動体験をする中での自己主張的なふるまいというものが考慮され、また実際場面において機能、作用しているかを捉えられてきているとはいえない。

そこで本研究においては、生後1年目後半の乳児と母親とを対象として、玩具遊び場面の観察を実施することとした。より具体的には、この時期明確に頻出し始めるとされる子どもの自己主張的な行動の前後に焦点化してコミュニケーションを抽出し、そこにおいて子どものどのようなふるまいにいわゆる主張的ニュアンスが見出され、母親とのやりとりで作用しているのかについて分析、考察を試みることにした。

3. 方法

(1) 予備観察：対象及び場面の選定

① 目的

対象選定に当たっては歩行という身体発達面の変化に着目する。歩行は世話する(母)／される(子)関係として安定していたところに生ずる能動性を帯びた子どもの成長であり二次元から三次元への世界の拡張である。またこの自立的な移動手段を得ることによって、乳児は生理的・直接的欲求に由来する快・不快などの感情分化を根底にもちながら、積極的に対人関係を構築し欲求充足することによってさらに感情を豊かにする時期であるとされる(田中、1981)。こうした変化は母親にとって喜ばしい成長であると同時に目に見える関係変化の手がかりと考えたことによる。この考えの妥当性を確認するとともに、本観察における場面設定の検討のために実施したものである。

②対象

歩行開始期の9.5ヵ月から14ヵ月齢の子ども6

名(男児3、女児3)とその母親の計6組。

③手続き

自由遊び場面の観察を1回20-30分/計5回実施。その際母親への聞き取り調査も実施。

④結果

母親への聞き取りなどにおいて歩行が他の行動発達に比して特別な変化の1つと確認できたため、歩行開始期+自己主張的行動の頻出時期の重なる生後1年目後半以降の乳児を対象とすることにした。また場面の選定については各対象に共通した遊び道具を用意することでの緩い制限をかけることとした。

(2) 本観察

①対象

自立歩行が顕著となってきた月齢12.5ヶ月齢の乳児(女児：月齢は観察開始時)とその母親。

②手続き

週2回・1ヶ月前後/計10回の短期縦断的な観察を実施。各回毎に20-30分の遊び場면을DVで記録し、観察後の母親への聞き取りはMDレコーダに保存した。遊び場面については持参した道具2種(①直径40cm程度の市販のストレッチボール②筆者製作の球体様の物。外殻は透明半球2つ、マジックテープで着脱可能。中にスチロール・ゴム・ウレタン材の大小様々な色付ボールと蛍光色のアカ・ミドリ・オレンジの採光板)を導入する緩やかな統制にとどめた。ストレッチボールは発達遅滞児のおける身体感覚を刺激する道具にヒントを得たもので、手製のボールは田中・田中(1981, 1982)にあるこの時期の心身発達面の特徴や対他者の活動の記述を参考に製作した。

③分析

乳児の自己主張的行動をてがかりに、それが相手である母親にどのように引き取られ後の展開があったか、またそこでの母子の関係を考察することを目指した。自己主張的な行動には一般に要求・拒否などの分類があるようだが、例えば何かを要求するということは、逆に言えば主張する相手に対して現状での不満、つまり現状の拒否や否定を

示している場合があることなどから厳密な区分は行わない。これは本研究がいわゆる自己主張的行動など個人のふるまいが、ある意味発し手以上に同時に受け手（母親）による意味付けにより変動し確定させられる側面が大きいこと（Bateson, 2000）を考慮したことにもよる。母親への聞き取りは、分析時の参考とした。

4. 結果

ここでは特に MY 女親子 1 組についての分析を提示する。MY 女親子の選定は、対象母子中もっとも“コミュニケーションらしさ”を有しており、そのため一見して円滑なコミュニケーション場面とみえていたが、明確な情動表出とはまた違う様相での自己主張的行動を伴うやりとりの記述が見込めたことによる。以下具体的にエピソードを提示し考察していく。

(1) 喜びや楽しみの共有；素直に応ずる MY

MY 女親子において当初特徴的であった母親の催促・提案に従順に応じ、それにより喜びを見出す形でのやりとりである。ここでは“～して？”という促しによく応じているものを示す。

この対象組を特徴づけているコミュニケーション形態の 1 つである。母親の「もってきて？」をはじめとした種々の働きかけは、MY への催促や促しが大半を占めている。MY はといえ

episode 1. ～して？に応えるたのしさ

MY が手をぶんぶんふって半球を部屋のはしっこに飛ばしてしまうのをみて「あらとんでちゃった。MY もってきて？」と声をかける。それと同時にすぐに立ちあがって拾いにいき、口をおおきくあけて戻ってくる MY をみて、「MY これももってきて？あそこいっちゃったから。」とさらに窓際のボールを指す M。同様に楽しげに応じる MY。（中略）ボールを受け取った M がまた「はいはい。ぼーん」と MY の方にボールを投げる。落ちたボールをみて M をみた MY に「MY もってきて！」と笑顔で頼む M。こうしたボールのやりとりがしばらく続く。〔第 2 回観察〕

episode 2. よく応じよくたのしむ

タワー型のおもちゃ。頂上にあった穴からボールを入れるとらせんをクルクル回りてくる仕組みで遊び道具として用意したスチロール球やゴムボールなどもあわせて入るものは「はい MY、これもはいよ？このアカのもの」とどンドン集めてくる M に応じて夢中でそれをいれつづけている MY。（中略）いれそこねたボールが転がってってしまう。「アう逃げられた。もってきて？ MY もってきてー」と論しながら、M は他に使えるようなボールを探す。M と顔みあわせた MY はスックとたっていってきて M にわたす。「アリガトじゃーいくよー？」と受け取ったボールを頂上からいれてやる M。「おっとう。あれ、あっちにもいっちゃったよ。とってきて？」という働きかけにも、即座にカタカタと歩いて笑う MY。〔第 6 回観察〕

にそれに応ずるという事がくり返され、一緒に笑ったり楽しむ・喜ぶなどの情動表出を伴っていることから多くの感情の共有が窺えた。母親の意図に応ずる形は頻出し、これに類似して母親の誘いや促しに半ば無条件に、まるで考えるまえにとりあえざるのっているような時も割と多くあった。

(2) 穏やかなせめぎあい

それに対し“～して？”などの催促に応じずにかかわっている形として興味深かったのが episode 3・4 などの形態である。

episode 3. そらすような、ごまかすような

2 人でストレッチボールをバンバンたたいていたが、不意に M がストレッチボールを部屋のはしに転がして「あ！いっちゃった。もってきて？ MY もってきて」と喚起する。ボールが転がっていくのをじっとみている MY だったが、唐突に歩き出すと、M のもとにはいかないで遊んでいる。「こないよーもってきてー？… M こないよう」というと、再度「とってきてー？」とその場から声をかける M。その場で立ったまま M とストレッチボール、それから元々手に持っていた空気入れを押して「プー」という音をだすと、M をぱっとみる。たてつづけにブヒブヒと空気入れを押して音をだすにつれ楽しくなってきた様子で「ン・ン」と声もでる。その様子に M が「プープー」と同調しつつも、再度度「M もっ

てきて？ボール」とはっきりした口調でいう。「もってきて？ポーンで。」しかしMをみながら空気入れを弄んでいたMYは、空気入れをもった手をあげて「ンー」と、笑顔で空気入れをMにさしだす。「あれそれがいいの？…じゃいくよ」といって、諦めたようにMも空気入れをプシュ、プシュとおしはじめる。いっしょになっていじりはじめるMY。
[第7回観察]

母親Yの「もってきて」という要求に応じず、自分の気になった空気入れを代わりに笑顔で差し出している。この空気入れは観察開始からずっと手離さなかった付属の手動ポンプ式空気入れだが、母親の要求ではない自分の興味ある物を持ち出すことが母親Yの側のふるまいの変更を促している。またMY女においてはこうしたふるまいの重なりから母親の意向と異なる自分の気持ちを自覚化していく可能性が窺える。

episode 4. 聞いてはいても…

観察の部屋からでていくこともしばしばのM、通たびにカメラ目線でニカッと笑う。そうした事情も含め、Mは「MYー、MYー。それじゃこれナイナイしちゃうよー。ナイナイー。…もういいのねー？」といいながらおもちゃの音をたててみせる。隣の部屋から一瞬きになったのか様子をうかがうようにして、入り口付近まで歩いていくとおもちゃをじっとみてからフィとそっぽをむいていってしまう。

前述で母親の誘いや促しについて半ば無条件に、考えるまえにとりあえずのっているような時があったことを指摘したが、こういう場面では特に興味の有無にかかわらず母親Yの“ナイナイするよー”などの呼びかけに対してひきずられるように戻りとりあえずいじるという展開だったものが、母親Yの呼びかけをそれなりに聴いて受け取りつつも、それから見極めて“～しない”と言っているかのようなそっけなさが生じてくるようになった。

総じて母親の誘いや促しに応じて喜びや楽しみを共有するという母親との密着した関係をまず確認しつつ、そうした関係の中で子どもが次第に母親の誘い・促しに合致する形でふるまいをせず

に（応じない）、自分の興味あるものをあてがったり、全く別のふるまいによって逸らすといったふるまいが頻出したのが非常に特徴的であった。

5. 考察

提示した対象組においては母親Yからの「～して？」「～しよう？」といった誘いや促しなどの意図に、基本的によく応じるMY女、という特徴的なコミュニケーションに留意し、回を重ねる中、MY児が時折みせる〔しない〕というふるまいに焦点化して分析を行ってきた。

全般的な傾向として、母親の誘いかけや促しに応じて喜びや楽しみを共有している事態を経験しているという母親との密着した関係が見られる中で、次第に頻出してきたのが母親の働きかけに対してそれまでの全面的な受け返しではなくいわば〔しない〕ふるまいであった。MY女には強い情動表出による要求や拒否といった、従来の研究においても指摘されるような明確な主張的行動は観察全般にわたってみられなかった。MY女にとっては、母親の意図とは異なるふるまいを示すことが彼女にとっての要求・拒否の自己表出のかたちであるように考えられた。母親の反応（働きかけ）によく反応する（働きかける）という、ある意味で自らの能力をフルに発揮する形で母親とコミュニケーションしていた対象にとってのこの〔しない〕ふるまいの意味とはなんであるのか。

その意味をふるまいが生じたコミュニケーション状況において理解を試みた結果、一般に理解されるいわば直線的で明確な情動表出を伴った要求・拒否といった自己主張的行動とは様相を異にしているために主張していないようにみえかねないが、その場面で母親の意図とは異なるふるまい、或いは無視したかのようなふるまいを示すことがこの対象にとっては自己の主張のあらわれとして母親とのやりとりにおいては機能している可能性が示唆されるだろう。

6. 総合考察

(1) まとめ

本研究においては生後1年目後半の乳児と母親のコミュニケーション場面について、子どもの自己主張的行動を手がかりにその内容について分析を行い、以下のことが明らかとなった。

まず自己主張的行動とは、従来の研究においては（いわば不特定の誰かに対して）自己の意図や意思を広く表出・伝達できる行為として考えられてきた向きがある。しかしながら、実際の具体的な文脈においてはそこでのコミュニケーションの相手に対する意思表示であるという点で単に個体還元的な能力発達として論じられるものではなく、それがどのような場面で発せられるのか、また誰との間であるのかによってその意味が立ち現れているのかを考慮する必要があるように思われる。そうした一定の文脈を包含してまずは捉えようとする作業によって、自己主張しないことが結果として自己主張となりうるという逆説的なふるまいを含めて捉えることも可能となってくるだろう。

さらに、従来の研究の場合には母子間のやりとりについて共感などの調和的なコミュニケーションが多く記述されてきたが、実際には多様な展開が有り得るものである。コミュニケーションが2者間の営みであるがゆえに生ずる不確定的な過程であるがために、またそれであればこそ子どもは様々な経験を重ねることとなり、それにより自身の欲求への自覚化や自己への気づきといったものも促される可能性があるだろう。

またそれに関連して、自己主張的行動の表出の多様さや状況依存的な性質（どのようなときにどのような形で表出されたのか、また同様の状況においても主張がされたりされなかったり等の選択的ふるまいがあること）は多分に個性などにかかわることであり、また実際のそれぞれの母子間（母親との）で重ねられてきたやりとりあってこそその多彩さであろう。その点で、今回のように具体的な個々のやりとりから考察することは、ひいては発達の個性性を考えるのに意義あることのように思われた。

(2) 本研究の限界と今後の課題

以上のような考察を進めてきたが、そこには次のような議論上の問題が浮かび上がる。

即ちここまでの記述では、個別性の問題を論ずる以前にまずある対象組・・・即ちある特定の関係性においてのみ成立しうる話ではないかという批判が当然でてくるだろう。先に述べた直観的育児などの研究や発話行為や行動特徴の分析などの知見（ex：岡本、2001など）において指摘されてきた、ある種の養育者の積極的な解釈や先回りによって、結果的にそれが主張的なものと考えられているに過ぎないという話であり、子どもの自己主張的なふるまいというよりは、結果的に解釈者依存的な形で主張が通ってしまったというだけではないかという批判である。

また、いわゆる顕在的・明示的な伝達行動を指標とする従来の観点とあわせて、このような「主張しないことが主張的に機能している」ような子どもがひとたび他の関係や文脈におかれた場合に果たして主張ができるのかという疑問に対しても有効な反論が提出しきれないのは認めざるをえない部分がある。

ただ多少乱暴な例えだが、従来重視されてきたような明示的な自己主張的行動をみせる子どもに対し、MY 女のような子どもの自己主張的なふるまいが低い水準にとどまっているといったような単一的な評価があてはまるものでないと思われる。このことをより積極的に子どもの自己主張的行動、ひいては自己の発達といったようなことに関連付けて言うならば、MY 女は母親への明確な情動表出や直接的な要求・拒否といった形でふるまいをとることはほとんどみられないが、母親の促しにきこえていないかのようにふるまったり全く別のものをもって応ずるといったそうしたようなふるまいなどは、むしろ母親にみられていることが想定されてのことであるとも考えられる。みられていることがあり、そうしてここでは母親の意図とは異なるふるまいを敢えて・意図的に示すことによって主張が通される結果が生じたのであり、これも彼女なりの自己表出の仕方であ

ると仮定的に理解することも不可能なことではないように思われる。

また、従来の観点に限定した形で自己主張的行動を扱うことは、非常に狭い枠内に限定した議論となる可能性がある。重要であるのは、明確に訴えかけることができるといったようなレベルでの、いわば1つのスキルのような自己主張というふるまいを表出することよりも、むしろ多様な展開がもたらされる可能性を有する他者とのやり取りの中で自己主張をするという経験であり、さらにはそれに付随して主張が通った時の満ち足りた気分や相手との共感する経験をしたり、時には通じない・思い通りにならない気持や葛藤、我慢なども含めた多彩な経験にあると考えられるのではないだろうか。このような経験を蓄積してきている子どもの場合には、むしろある特定の関係性からはずれた場合であっても、いかに欲求やあるいは自己というものを提示していくのが柔軟に対応する可能性がひらかれることは、想像に難くないように思われた。

この見地に拠って議論を重ねるためには、ここで論じたことを仮説的に位置づけ検討することが1つ考えられるだろう。即ち関係特異的ではなく仮にその関係や文脈から離れた場合であっても、むしろそれを超えたところで自己の主張、自己の表出をある側面からみれば強固にそして安定的におこなっているあらわれとしての特徴的なふるまいであるということをより詳細に検討することなどが1つとしてあるように思われた。

7. おわりに

関係性に留意した原初的なコミュニケーションにおいてはまずやりとりという動きと母親による積極的な意味づけにより、慈愛に満ちた関係や発達可能性がひらかれることは想像に難くない。ただ、こうした関係には一方で次のような見方が有り得るようにも思われる。ひとつの思いつきから脱却していない感想めいたものであるがここにそれを記述させてもらえば即ち、子どものあるふるまいはいかようにも解釈可能であるところ、

親をはじめとする周囲の大人たちによる意味づけは（結果として）その可能性を縮減しているのではないかという話である。言い換えると多様な解釈に開かれた（子どもの）行動の意味が、コミュニケーションの相手（ここでは身近な他者、母親）によって特定化されることで、結果として方向性をもって展開していくと見る見方である。それが良い悪いを抜きにした、発達初期に子どもが置かれる環境ではないだろうか。

近年発達研究においては他者性・関係性を採り入れた研究を、という論調が訴えられて久しく、それらを巧みに導入することによる発達における個別性へのさらなる接近可能性が論じられてきている。総じて他者をいかにより具体的で、現実実感されるのと同様に発達に意味を持つ者として研究に反映させられるかということは発達研究において重要な問題であると言え、その意味でこのような見方はあるいは有効となるかもしれない。自分にとっては、今後の研究を進めていく上でもさらに深めたい事項である。

文献

- 足立智昭・村井憲男・岡田斉・仁平義明 1985 母親の乳児の泣き声の知覚に関する研究 教育心理学研究33 (2), 146-151.
- Bateson, G・Ruesch, J 著 佐藤悦子・R. ボスバーク訳 1995 精神のコミュニケーション 新思索社
- エリ・エス・ヴィゴツキー著 柴田義松・藤本卓・森岡修一訳 1987 心理学の危機 歴史的意味と方法論の研究 ヴィゴツキー著作選集1 明治図書
- G. ベイトソン著 佐藤良明訳 2000 精神の生態学 新思索社
- 石野秀明 2001 2～3歳児の子どもの存在／自己のありようを記述する試み：主体間の両義的な力動関係という観点から 発達心理学研究12 (2), 110-122.
- J. ボウルビィ著 黒田実郎他訳 1991 母子関係の理論 岩崎学術出版社
- 鯨岡 峻 1999b 関係発達論の構築 ミネルヴァ書房

- ゲオルク・クニール／アルミン・ナセヒ 著 舘野受男・池田貞夫・野崎和義 訳 1995 ルーマン 社会システム理論 新泉社
- M. ホルクウィスト 著 伊藤誓 訳 1994 ダイアローグの思想ーミハイル・バフチンの可能性 法政大学出版局
- M. マルティネ 著 山本政人・村越邦男 共訳 1991 情動の理論 アンリ・ワロン入門 白石書店
- 無藤 隆 1990 意味の世界をつくり出すこと 岡本夏木・村井潤一監修 発達, 42, 86-95
- 岡本依子・菅野幸恵・青木弥生・八木下暁子・亀井美弥子・川田学・高橋千枝 2001 妊娠期から生後2歳までの縦断的研究から見る母子関係(5): 母親による子どもの代弁について・生後0～6ヶ月の発達の变化 日本発達心理学会第12回大会発表論文集, p278
- Papousek, H., & Papousek, M. 1992 Beyond emotional bonding: The role of preverbal communication in mental growth and health. *Infant Mental Health journal*, 13, 42-52
- 斎藤久美子 1992 Self-Regulation の発達における対人関係 *Coder News Letter*, 23, 1-4
- 斎藤久美子 1993 セルフ・レギュレーションの発達と母子関係 *精神分析研究* 136, 5, 478-484
- スターン, D 著 岡村佳子 訳 1979 母子関係の発達サイエンス社
- 田中昌人・田中杉恵 著 有田知行 写真 1981 子どもの発達と診断1 大月書店
- Tomasello, M. 1993 On the interpersonal origins of self-concept. In U. Neisser (Ed.), *The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge* (pp.174-184). Cambridge: Cambridge university Press.
- ヴィゴツキー・ルリヤ 著 柴田義松・藤本卓・森岡修一 訳 1987 人間行動の発達過程 猿・原始人・子ども ヴィゴツキー著作選集2 明治図書
- Wallon, H 浜田寿美男 訳 1983 身体・自我・社会 ミネルヴァ書房

(修士課程)